

月下独酌

花間一壺の酒

杯を挙げて明月を邀え

月既飲解

李

独り酌んで相親しむ無し

影に對して三人と成る

影徒らに我身に随う

白

暫く月と影とを伴つて

我れ歌えば月徘徊し

醒る時同じく交歓し

永く無情の遊を結び

行樂須らく春に及べし

我れ舞えば影凌乱す

酔うて後各分散す

相期して雲漢邈なり

【作者】

李白（七〇一〜七六二年）・盛唐の詩人。字は太白。自ら青蓮居士と号する。世に詩仙と称される。西域・隴西の成紀の人で、四川で育つ。若くして諸国を漫遊し、後に出仕して、翰林供奉となるが高力士の讒言（ざんげん）に遭い、退けられる。安史の乱では苦勞をする。後、永王が謀亂を起こしたのに際して幕僚となっていたために、罪を得て夜郎にながされたが、やがて赦された。

【語釈】

*月下獨酌：月光の下で、独り酒を飲んで。

*花間：咲いている花の下で。うららかな春に。
一本。

*一壺酒：一壺の酒。酒のボトル

*獨酌：独りだけで酒を飲む。 *相親：親しい人。

*舉杯：さかづきを持ち上げる。 *邀：迎える。 *明月：清らかな月影。

*對：むきあう。むかえる。あわせる。数える。 *影：影法師。光をさえぎった時にできる黒い形。

*不解：理解しない。 *飲：飲酒。酒を飲む。 *隨：つきしたがう。 *我身：わたしの身体。

*雲漢：天の川。仙界でもある。

【通釈】

花の下にあつて、一壺の酒で、親しい人もいなくて、独りぼっちで、酒を酌くむ。杯を持ち上げて、清らかな月を迎えると、影法師とむきあうことになり、三人となった。月の方は飲酒ということが解らないばかりか、影法師の方も、ただいたずらにわたしの身体つきしたがうだけである。

しばらくは、月と影とを伴なおう、山野に出て遊び楽しむのは、春に なってからすべきである、楽しみごとをするのは、春が最適である。

わたしが歌えば、月は さまよい、わたしが舞えば、影法師は乱れ動く。

まだ酔わないでしっかりと、さめている時は、ともに、親しく交わり楽しむが、酔っぱらったあとは、それぞれ分かれ散らばってしまう。

末永く、人情を超越した清遊を結び、遙かな天の川で、日時を約束して会うことにしよう。